学問は「投機」？　　09 / 02 / 11

経済学者中谷巌は今日の新聞（読売）で「資本主義の本質は〈投機〉である」と述べている。昨秋以来の世界経済の激変は、お金を増やす行き過ぎた金融技術の当然の破綻に端を発した。そこから生じている現在の恐慌はいつ、どのような形で収束するのだろうか。こうした事態は百年に一度と言われているが、今度は少なくとも五百年に一度の価値観の大変革を伴うのではないかというのが筆者の予感である。

私はちょうど五十年前、秋田の山奥から東京に出た。思えば物心ついてから十八歳までの生存の基調は貨幣経済的なものではなく、物々交換的感覚に満ちたものだった。物々交換を基調とした生活リズムは、私の村では、中央の弥生時代からの大きな時代区分毎の価値変貌の影響をあまりうけないまま、縄文時代からそのまま続いてきたものではないかと思う。

生きるのに必要なモノにじかに接することが可能だった辺境秋田時代と違い、大都会の生活においては実体の記号化を通して財に接近する。こうしたヴァーチャル化に慣れると、具体物に対する身体感覚が薄れてくる。空気、土、水、光、火、熱、匂い、音、声などに対する感覚が衰える結果、知らない国の経験したこともない問題は、言語化し、客観化、論理化したつもりで自己の感受性から離脱させないと対処できなくなる。しかし身体から切り離されたこうした頭では、ソマリア沖の「海賊」（古代では貴族扱いされた）と環境問題とは結びつくことなく、海賊発生の原因は理解できないまま、ひたすら軍事力で「無法な海賊」の消滅をはかることになる。具体感覚を軽蔑し、抽象化能力のみ価値あるものと考える人間はバカである。

大きな戦いもなく、三内丸山文明を千五百年間維持させた縄文時代の人間は現代人よりはるかに賢い。彼らの社会には、現代社会に必要不可欠な記号とされる貨幣が存在しなかった。ホメーロスの作品は、今から三千年以上まえの古代社会を歌ったものだが、描かれたこの社会には貨幣使用の跡がない。貨幣が実際になかったとは考えられないが、作品のなかのこうした貨幣の不在から、当時の歌い手が貨幣という経済記号をどのように考えていたかを伺い知ることができる。

欧米の言語文化の根源に位置する古典研究がおろそかにされはじめて久しい。現代人の価値観が変わり大昔の人間の世界観が理解できなくなってしまっている。古典語はおろか中世語に無知でも西洋思想・文学・言語の専門家、批評家であると称している。古い言語が貨幣に結びつく事は稀であり、これを知らなくても、現代ではなんのコンプレックスもなく学者の看板を立てることが可能なのだ。

しかし古典など翻訳で読めば足りる、という考えは大きな間違いである。数学や物理化学と違い、文学作品はその言語の世界観そのものと固く結びついている。方程式の解法は、それぞれ違った言語で説明されても同じ解にたどり着くが、そうはいかないところに文学作品の作品としての意味がある。各言語には固有のものの見方があり、それが作品の価値・意味と密着している。ホメーロスの作品はホメーロスの言語で解読し、詩（うた）は歌ってみなくてはならない。

経済問題から始まった昨今の社会の激動は、忘れ去った価値観を現代人が取り戻さないかぎり、この社会は釣り合いのとれた状態に立ち戻ることができないことを意味しているのではないか。われわれ人類が過去に保持し、いま見失ってしまっている人間性を取り戻すためにこの大変動はまたとない好機なのだ。

明治学院大学『言語文化』26 号 2009/3